

## 文学および社会における「近代」 —インターカルチャー的観点からみた—

Intercultural Study of Modernity in Literature and Society

総括研究員：植和田光晴

分担研究員：石川 實 神崎ゆかり 北野雄士 木村英二 中村茂裕 山元哲朗

標記の総合課題を掲げて昨春発足したこのプロジェクト研究グループは、活動開始にあたって月一回の定例研究会を設定した。この研究会の場で各分担研究員はそれぞれの個別的研究テーマについて、その成果を順次発表した。またそれらの発表について、その都度全体で質疑・応答、討論がなされた。以下に昨年度一年間の研究成果をレジュメとして列挙し、中間報告とする（50音順）。

### 植和田 光晴：リルケの「トラークル書簡」についての一考察

1915年2月8日付けのL. v. フィッカーに宛てたリルケの手紙（＝「トラークル書簡の一つ」）にキルケゴールの「紙包み」の記述がある。これはこの時期にリルケと、フィッカーを中心とするいわゆる『ブレンナー』＝クライスとの間に、キルケゴールについてのある種の了解あるいは共感が共有されていたことを推測させる。そのことを両者に関わる資料から裏づけ、この哲学者が、『ブレンナー』＝クライスにおけるトラークル理解に深く関わっていたことを確かめた（1997年11月18日 定例研究会で発表）。他に「宮澤賢治の作品論—インターカルチャー的観点からの一構想—」を発表（1998年2月17日）。

### 石川 實：表情的認知について

合理的近代の一つの特色は概念的言語万能信仰である。しかし我々は言葉で表現できるよりはるかに多くのことを認知しており、それによって判断し、行動している。我々は相手の言葉ではなく微妙な表情の変化から心を読み取り、足を踏み入れた部屋の「空気」から人々の敵意を知る。だが、この認知を言語によって明確に表現せよと言われても無理だ。このような表情的認知こそ生きるために大切なものであり、この日常生活の体験は合理的近代のドグマを破る一つの突破口になるだろう。（1988年1月20日 定例研究会で発表）

### 神崎 ゆかり：チャールズ・ブロックデン・ブラウンのアメリカ的ゴシック

アメリカのゴシック小説は、18世紀にイギリスで流行したゴシック小説の影響を受けて出発したものである。しかし、単なる模倣に終わることなく、アメリカ的要素を加味することにより新しいジャンルとして確立するに至った。そこで、イギリスとアメリカのゴシック小説を比較検討することにより、アメリカン・ゴシックの特徴を明らかにし、その系譜を辿ることが研究目的である。今年度は、特にアメリカン・ゴシックの原点と言われて

いる、チャールズ・ブロックデン・ブラウンに焦点を当て、彼の作品に見られるアメリ的要素を考察した。(1997年9月16日および1998年3月24日 定例研究会で発表)

### 北野 雄士：横井小楠の近代国家構想とその特質

幕末の知識人のなかには、尊皇攘夷が叫ばれる中でも西洋に偏見を持たず、西洋文明と東洋文明を媒介して新しい日本社会を作り出そうとした人々がいた。本年度は、その代表的な一人であり、明治国家の枠組みを構想した横井小楠に焦点をしぼり、その思想の独自性を探求するために、二人の江戸時代人、すなわち、小楠と同じく富農層の立場に立って、農家を豊かにするために活躍した農学者、大蔵永常、及び小楠の政治思想に大きな影響を与えた儒者、熊沢蕃山とを比較した。(1997年5月27日および10月21日 定例研究会で発表)

### 木村 英二：ベンヤミンにおける子どもの「知」について、他

本年度は主として、「ベンヤミンにおける子どもの『知』について」ならびに「ストリンダベリ、表現主義から初期ブレヒトへ」という二つのテーマを追究した。前者ではベンヤミンの子どもの本との関わりを跡づけながら、彼が「子どもの知」の中に近代のロゴス中心主義を克服する「知」のありかたを見出していることを明らかにした。また後者では、ストリンダベリから初期ブレヒトの演劇に至るプロセスにおいて「個人」の解体を背景にしながらルネサンス以降の「近代ドラマ」がいかに変遷していったのかを論究した。(1997年7月22日 定例研究会で発表)

### 中村 茂裕：ホフマンにおける都市空間認識

「都市」をテーマとして17世紀から19世紀までの空間認識との関連において都市の定義・特徴などを分析した。さらに文学における都市描写を、ホフマンの都市を舞台にした作品群を対象に分析したが、その際、考察のキーワードとして「遠近法(パースペクティブ)」「文明と自然」「機械」などを用いた。以上のような研究分析と併行して、1997年6月24日に、「ホフマンにおける都市空間認識」と題して研究報告を行なった。(1997年6月24日 定例研究会で発表)

### 山元 哲朗：伊東静雄におけるヘルダーリン受容

萩原朔太郎をして「日本にもまだ詩人が一人居た」といわしめた伊東静雄が、その豊かな詩才に加え、鷹のように鋭いその眼差しが、プルースト、セガンティーニ等ヨーロッパ世界にも向けられ、殊にリルケ、ケストナー、ニーチェ等ドイツ文学への深い傾倒を示していたことは、よく知られているところである。「詩と散文はメタファーが分派する」と云う静雄は、就中、リルケの「形象」への深い沈潜から、ヘルダーリン独自のメタファーによる高い詩想領域へと誘われていく。本稿はこの飛翔への動機と昇華への過程に考察の目を向けるものである。(次回定例研究会で発表の予定)